2021 年度

愛知の読書・学校図書館

（第 50 集）

も　く　じ

Ⅰ　はじめに ……2

Ⅱ　研究の内容
　1　教育課程編成活動について ……3

Ⅲ　教育実践 ……6
　1　第 71 次教育研究愛知県集会の動向
　（１）　読書指導について……6
　（２）　情報活用について……7
　（３）　学校司書や公共機関との連携……9
Ⅳ　情報交換・研究協議……10
Ⅴ　助言……11

Ⅵ　おわりに……12

愛知教職員組合連合会　教育課程研究委員会「読書・学校図書館」部会
2021 年度　教育課程研究委員

ブロック推薦　　◎部長　○副部長

名　古　屋			尾　　張			三　　河		
氏　名	単組	学校名	氏　名	単組	学校名	氏　名	単組	学校名
○水野　徹	名古屋	東築地小	籏　大貴	海部	天王中	杉本　梢	豊田	寿恵野小
岩井友美子	名古屋	藤が丘小	遠山友加里	一宮	木曽川西小	白形　奈穂	岡崎	北中

第 67 次～第 70 次教育研究全国集会リポート提出者

	氏　　名		単組	学校名
第67次	部長	◎福岡　寛也	豊橋	北部中
第68次		大池　梨沙	尾北	古知野南小
	副部長	○(代)今井　舞	尾北	城東中
第69次		安井智奈美	名古屋	明徳小
第70次	――	――――	―――	―――

第 71 次教育研究全国集会リポート提出者　平松亜弥美（豊橋・八町小）

Ⅰ　はじめに

読書活動は，子どもが，言葉を学び，感性を磨き，表現力を高め，創造力を豊かなものにし，人生をより深く生きる力を身につけていく上で欠くことのできないものといわれている。テレビ，インターネット等のさまざまな情報メディアの発達・普及や子どもの生活環境の変化などにより，子どもの「読書離れ」が指摘される今日，子どもたちに読書の楽しさを味わわせるとともに，読書を通して豊かな心を育んでいくことが求められている。

今後もますます情報化がすすむことで，多種多様な情報の中から，自分たちの生活に必要な情報を収集し，何が有効な情報であるかを取捨選択し，課題を解決する力を培うことが必要となってくる。そのためには，「学習・情報センター」としての学校図書館の整備・充実をはかるとともに，自らの課題解決のために情報を収集・選択して活用していく技能を高める指導を行っていくことが大切である。

また，本を介して意見や感想を交流することで，人と人とがつながりをもち，心を通わせていくことも求められている。子どもの読書量は，学年がすすむにつれて減少してきているのが現状である。子どもたちは日常生活の中で，テレビやゲーム，ＳＮＳでのやりとりに夢中になり，人との関係が希薄になってきている。こうした子どもたちに，友だちや教員とのふれあいの場をもたせたりする活動を積極的に取り入れることが人と人がつながるよさを感じさせる上で有効であると考える。

こうしたことから，現代の子どもたちにとって必要な学校図書館教育の役割は，次の3点であると考える。

○　読書の楽しさを味わわせ，すすんで読書に親しむ態度を育て，豊かな感性や情操を育む「読書センター」としての役割

○　友だちやいろいろな人との心の交流を通して，豊かな人間形成をはかるための「学びの場」としての役割

○　利用しやすい環境を整え，自らの課題を解決するために，図書資料を効果的に活用する能力や態度を培う「学習・情報センター」としての役割

地域によって差はあるものの，法律の改正により学校司書の配置がすすめられ，学校司書教諭と学校司書との連携による実践の報告も増えている。現代社会に生きる子どもたちが，多くの本と出会い，自らの課題を解決することで，現代文化を見つめ直し，よりよい未来を築いてくれることを願っている。

Ⅱ　研究の内容

1　教育課程編成活動について

心豊かな子どもを育てていくためには，読書を通してさまざまな体験をしたり，本を介して人と人とがふれあえる活動を行ったりすることが大切である。また，多様な情報を収集するとともに取捨選択し，自ら課題を解決する力を培っていくことも大切である。そのためには「読書センター」としての役割のみならず，「学習・情報センター」として魅力ある図書館運営と活用についての研究が重要となってきた。

本分科会では，言語活動の充実をはかりながら，「ゆたかな学び」のある読書指導のあり方や，読書活動を取り入れた授業実践の手だてを追究してきた。そして，教育課程編成については，次の点を考慮した。

教育課程編成にあたっての基本的な考え

○　「基礎・基本」について

・　読書の楽しさを味わい，すすんで読書に親しむ態度を育てるとともに，読書の習慣化や継続化をはかる。

・　読書活動を通して，「考える力」「感じる力」「想像する力」「表現する力」を培っていく。

○　「生きてはたらく力」をのばすための重点

・　自らの課題を解決するために，すすんで資料を収集・選択して活用することができるように，段階を追って系統的に利用指導を行う。

・　一人ひとりの学びを大切にし，学ぶ喜びやわかる楽しさを味わうことができる授業研究を行う。

また，学校図書館において「わかる授業・楽しい学校」を実現させていくためには，読書指導と利用指導を学校の教育課程に位置づけ，系統的に指導していく必要がある。

「ゆたかな学び」を育んでいくため，小・中学校における学びのポイントに沿って実践を行っている。

【小・中学校における「ゆたかな学び」のポイント】

		読　書　指　導		利 用 指 導
		読　書　能　力	読後の活動能力	図書館活用の実践力
小学校	低	やさしい読み物を楽しく読む。	興味をもった場面を話したり絵に表現したりする。	好きなことや疑問に思ったことを調べる。
	中	いろいろな読み物を読み，読書範囲を広げる。	感動した場面を話したり絵に表現したりする。	知識や情報を得るために図書館を活用する。
	高	関心をもってさまざまな分野の本を読む。	感想を意見交流したり，効果的な表現方法で表現したりする。	課題や目的に応じて必要な情報を収集し，取捨選択して活用する。
中学校		目的に応じて適切な本を選び，すすんで読む習慣をつける。	感想や意見を交流していくことで，ものの見方や考え方を広げ，深める。	参考資料の種類や特性を知り，活用する。目的に応じた方法で発信する。

□　図書館教育

教育活動にあたっての基本的な考え

○「基礎・基本」
・　読書の楽しさを味わい，すすんで読書に親しむ態度を育てるとともに，読書の習慣化や継続をはかる。
・　読書活動を通して，「考える力」「感じる力」「表現する力」を培っていく。
○「生きてはたらく力」
・　自らの課題を解決するために，すすんで資料を収集・選択して活用することができるように段階を追って系統的に利用指導を行う。
・一人ひとりの学びを大切にし，学ぶ喜びやわかる楽しさを味わうことができる授業研究を行う。

実践例　「図書館を身近に感じ，図書資料を活用する子の育成」（中学生）

１　ねらい

２年生の総合学習での分野別の調べ学習を通して，図書資料を活用することで，まとめがより充実することを実感させる。また，委員会活動での読み聞かせやポップ作りなどを通して，図書と触れ合う楽しさを感じさせる。

２　実践例における「ゆたかな学び」のポイント

２年生の総合的な学習では，１年生のときから調べてきたテーマに関する本を選び，知識を深める活動に取り組む。その中で，どのような視点をもって資料を探したか，また，本から知識が得られたかということを小グループで話し合う。よりよい資料の探し方と活用の仕方を学ぶ。

委員会活動では，図書委員が中心となって読み聞かせやポップ作りを行う。自分の好きな本を選ぶのではなく，同学年の生徒が興味をもちそうな本を選び，活動に取り組む。

３　実践について

（１）　総合学習の実践

本校の総合学習では,以下の表のように４つの分野に分かれて課題追究学習を行っている。

①　歴史・伝統
②　環境・自然
③　福祉・国際理解（平和）
④　生活・技術（食・健康）

【生徒が選んだ資料】

各分野内で個人の追究課題を設定して，調べ学習に取り組む。図書館で自分が追究したい内容に関する図書を選ぶ際には，まず個人で選書してから，近い内容で追究学習している生徒と小グループを組み,図書の話し合いを行う。自力で探せない生徒は,図書館司書からアドバイスをもらいながら，資料探しを行う。

話し合い活動では,それぞれが見つけた資料から得られる知識についても伝え合うことで,まとめに取り入れていく内容を考えるようにする。

（２）　委員会活動での実践

①　読み聞かせ活動

給食の時間に，全校放送で図書委員による読み聞かせを行う。実施する日を複数に分け，５～８分程度の読み聞かせを行う。短編集やファンタジーの一部分など，図書に関心が高まるような本を選び，小グループで役割や読む部分を分担して練習を行う。登場人物の心情や場面の様子などをグループで分析し，感情を込めて読むことで，作品の魅力が伝わるように工夫する。読み聞かせ終了後は，図書館に読み聞かせで取り上げた本を紹介するコーナーを設けて，来館した生徒が本を手に取りやすいようにする。

【ポップの展示】

②　ポップ作り

図書委員がおすすめしたい本を選び，ポップを作成する。作成する前に，委員会活動の時間を利用して，どこに重点を置いて作成するか，話し合う。印象的なキャッチコピーや言葉を考えたり，イラストなどのデザインを工夫したりして，より多くの生徒が本を手に取りたくなるようにする。完成後は，展示の仕方を図書館司書と相談して決め，一定期間展示する。

【図書委員が作成したポップ】

４　実践のまとめ

（１）成果

総合学習の話し合い活動では，図書資料は見やすいレイアウトで説明されているため，レポートにまとめる際，役立つということに気付いた生徒がいた。選んだ資料によっては，調べたい内容に関連した情報が一緒にまとめられており，追究学習をすすめていく上での参考にすることができることに気付いた生徒もいた。

読み聞かせでは，「５分後シリーズ」にあるミステリーの短編を選んだり，恋愛小説の盛り上がる部分を抜き出したりして，聞き手の関心を惹くことができた。読み聞かせを実施した翌日は，来館者数が他の日の倍になり，図書委員が読み聞かせで取り上げた本の所在を聞く生徒も多かった。また，同じシリーズの本を紹介してもらい，借りていく生徒も多かった。実践は１月に行い，図書委員が作成したポップを目にして本を借りていく生徒も多かったため，貸し出し冊数は前の月に比べて，以下の表の通りに増加していた。

4 月	5 月	6 月	7 月	9 月	10 月	11 月	12 月	1 月	2 月	3 月	合計
271 冊	424 冊	354 冊	483 冊	517 冊	562 冊	469 冊	472 冊	665 冊	597 冊	319 冊	5,135 冊

（２）　課題

調べ学習の際に，本校の図書館にある本だけでは資料不足であるという生徒がいた。今後は市立図書館と連携をはかり，生徒がより多くの資料の中から知識を選び取れるようにしたい。また，図書に掲載されている情報が精選されていることや一覧性に優れていることなどにも気付かせ，課題追究学習以外の場面でも情報を活用できるようにしていきたい。

Ⅲ　教育実践

1　第 71 次教育研究愛知県集会の動向

（1）　読書指導について

本年度は，読書指導を中心とした実践が４本報告された。その中で,「人に本を紹介すること」を通して，自他の理解を深めたり，読解力を高めたりすることをめざすという活動が共通してみられた。

岡崎からは，小学校５年生の総合的な学習の時間での「福祉」の授業と国語科の授業との教科横断的な実践が報告された。「福祉」の中でも「ジェンダーフリー」と「心のバリアフリー」に的を置き，自己理解・他者理解し，価値観を広げるために，読書活動を取り入れた。まず，児童それぞれがお気に入りの本を持ち寄り，決められた時間で紹介し合い，一番読みたくなった本を投票で決める「ビブリオバトル」を行った。この活動では，紹介の準備をする中で児童は自分自身の嗜好や考え方を振り返り，他の児童の紹介を聞くことで他者のことをより深く知りたいという思いをもたせることができた。また，読書への興味・関心を高めることもできた。その後の総合の授業では,『たかくとびたて女の子』（汐文社）の読み聞かせにより，ジェンダーフリーについての理解を深め,『わたし』（福音館書店）と『新しい心のバリアフリーずかん―きみの「あたりまえ」を見直そう！―』を紹介することで，違いを認め合い，違いによる壁をなくそうとする心を育むことができた。

また，岡崎から中学校１年生の国語科のとりくみとして，生徒に配付されているタブレットのスクールタクトを利用して読書紹介を行うという実践が報告された。まず，生徒の読書への興味・関心を高めるための手だてとして，教師によるブックトークを行った。ブックトークは，より生徒に読書を身近に感じさせるために，生徒の関心が高い内容をテーマに数冊選書し，計２回行った。その後，教師のブックトークを聞いて興味をもってその本を読んだり,テーマに関連して教師が集めた本の中から選んで手に取ったりする生徒の姿がみられた。続いて，生徒自身がおすすめの本を紹介し合う活動を行った。生徒は紹介する本を決め，スクールタクトにデジタルフリップを作成した。フリップの作成にあたっては，本の表紙の画像の挿入などの必要事項に加え，ブックトークと同じように，紹介された人がその本を読んでみたいと思うような工夫をするよう教師から促した。スクールタクトを利用することで，発表を聞いた感想や紹介された本を実際に読んでみた感想をコメント欄に書き込むことができるので，当人たちだけでなくその感想交流を読んだ他の生徒の読書意欲を刺激することができた。また，気になったフリップを保存しておけば，自分が今後読みたい本の「ブックリスト」としていつでも見返せるようになるという利点もあった。

刈谷からは，本の紹介ポップの作成を通して教科書の教材の読解を深め，読書のよさを再確認させる実践が報告された。まず，小学５年生の教材『大造じいさんとガン』では，場面ごとの読み取りをした際に，その場面の優れた表現について紹介する練習ポップの作成を行った。児童たちは各々が情景や心情を表す表現の中から優れたものを選び，その箇所を選んだ理由を書いた。作品を読み終えたのち，児童たちはそれまでに作成した練習ポップを参考にしながら,『大造じいさんとガン』の紹介ポップの作成に取り組んだ。その後，学校司書と協力して椋鳩十の図書のブックトークを行い，児童たちはそこで出会った本の紹介ポップを書いて図書館に展示した。これらの学習を通して，児童は自ら興味をもって一つ一つの表現に込められた意味を考えることができ，作品を読み深めていく楽しさを実感することができた。また，誰かに本のよさを伝えるという目的意識をもって本を読み，紹介ポップを書くことで，読書活動の面白さを再発見することができた。

豊田からは，相手意識・目的意識をもって選書する活動を通して，読書の意義を実感し，

生涯にわたり読書に親しむ心を養う実践が報告された。選書活動では，中学校の先生に趣向や悩みなどについてインタビューをして，その先生に合った本を薦める「おせっかい選書」に取り組んだ。その際，学校図書館司書や市内の司書と連携を取り，生徒が活用しやすい選書リストを作成してもらったり，迷っている生徒の相談にのってもらったりして，選書の手助けとなるようにした。本を薦めた先生に喜んでもらえたことで，読書の必要性や意義を実感し，選書への自信をつけることができた。また，生徒たちの読書に対する考え方を広げるために,「人＋ｂｏｏｋ＝○○」というテーマで，大学教授や豊田市中央図書館職員をゲストティーチャーとして迎えて対話を行ったり，タブレットの skymenu の「グルーピング」機能を利用して，思考の整理を行ったりした。これらの学習を経て，読書が人を豊かにするということを実感することができた生徒たちは，総合的な学習の時間に２０歳の自分に薦めたい本の選書を行った。生徒たちの中には,「おせっかい選書」で利用したブックリストを活用したり，中央図書館に足を運んで本を選んだりする姿がみられ，読書を未来の自分につなげていこうと主体的に本と向き合う力をつけることができたと考えられる。

（２）　情報活用について

本年度は，３校の学校から，図書館資料を活用した調べ学習の実践が発表された。

名古屋の小学校からは, 5 年生の児童を対象に,「調べ学習に主体的に取り組む児童の育成」をめざす実践が報告された。

まず，調べ学習における語彙不足を補うために，ウェビング（マインドマップづくり）を行い，分からない言葉を辞書で調べる活動を行った。友達と交流をしたり，初めて知った言葉を赤字で付け加えたりすることで，語彙を増やしていく姿がみられた。分からない言葉が出てくると国語辞典で調べる児童も増えたが，その場限りの活動となってしまい，語彙を獲得しているとは言い難かった。学習に関連したキーワードを設定したり，調べたいテーマについてウェビングしたりするようにしていき，他の場面調べた語彙を活用できるようにする必要性を感じた。

次に，百科事典を使った調べ学習を行った。調べ活動をするときに，本よりウェブサイトで調べる方が便利だと考えている児童が多くいるが，百科事典で基礎知識を蓄えてから専門書で深く調べていくことのよさを学ぶことで,児童は図書資料のよさや情報量の多さに触れ,正しい情報を調べたいときには，図書資料が便利で分かりやすいと気付くことができた。さらに，自分の必要としている情報を選択して取り込むことができた。しかし，内容を調べただけでは調べ学習にいかされていることにはならないので，実際に授業で活用していくことにした。

最後に，調べる内容について予想をしてから，調べ学習に取り組んだ。総合的な学習の時間に，夏のオリンピックに合わせて，外国について調べたり，社会科の自動車の単元の導入で，自動車の秘密について複数の図書資料で調べたりした。どちらの実践も，ワークシートに予想を記入し，百科事典で調べた後，専門書で調べることにした。詳細な情報を調べるために，名古屋市図書館から「学習支援セット」や,「団体貸出」を活用して本を借りた。予想してから調べたことで，新たな発見をすることができ，主体的に取り組むことができた。新たな疑問を見つけ，学びを掘り下げていく姿もみられた。それぞれのテーマに合わせて複数の図書資料を活用し，主体的に調べ学習に取り組む児童の姿が多くみられた。一方で，情報が載っている図書資料を,うまく見つけられない児童もいた。十分な蔵書を用意することで，児童が調べたいときに適切に図書資料を選ぶことができる環境を整えることが必要だった。実践後には,「本を使って調べることのよさを感じた」と答えた児童が多かった。また，予想してから複数の図書資料を使って調べることで，その予想が合っているかを確かめ，情報を

比較する力がついた。

西尾の小学校からは,「学校図書館を利用し，友達とかかわり合いながら主体的に学ぶ子の育成」をめざす実践が報告された。３年生国語科の「はたらく犬を調べよう」の単元で，自ら課題をもち，本や資料から必要な情報を見つけて要約したり，友達とかかわり合いながら学びを深めたりすることで，情報を分かりやすくまとめ，伝える力を身につけることをめざした。

まず，はたらく犬について興味をもち，自ら課題をもてるようにするため，学校司書によるブックトークを行った。一人一冊以上の本を用意し，並行読書ができる環境を整えておくと，児童たちは思い思い本を手に取って，休み時間や朝の読書タイムに読んでいた。次に，ワークシートや百科事典を用いて要約の仕方を身につけさせた。実際に百科事典で，ペンギン，カブトムシ，サッカーの３つの言葉について調べ，定義（○○とは）を書き，３行でまとめさせた。「要約が楽しい・得意・好き」と述べる児童の姿もみられ，休み時間にも続けて挑戦する様子がみられた。３行で書くという具体的な指示や，みんなで同じ言葉を要約し理解できたことで，多くの児童が意欲的にとりくみ，要約できるという実感をもつことができた。

最後に，リーフレットの製作に取り組んだ。まず，盲導犬についてのリーフレット作り，リーフレットのよさを学んだあと，他の働く犬について調べ，リーフレットにまとめた。図書資料で調べながら書いた下書きを持ち寄り，グループでアドバイスをし合った。清書をして完成したリーフレットを廊下に展示すると，他のクラスの児童や来校した保護者に認めてもらい，達成感を味わうことができた。調べてまとめる楽しさを感じることができ，次への意欲をもつことができた。

学校図書館司書の協力を得て，たくさんの図書資料を用意し，並行読書を行ったことで，はたらく犬についての興味を高めることができた。また，学校のみんなやお家の人に伝えたいという思いをもつことができた。また，要約の仕方について学んだことで必要な情報についてまとめる力を身につけるとともに，友達とのかかわりをもつ場面を設定することで，自分には気付かなかった部分に気付くことができた。

豊田の学校からは，１年生の児童を対象に，生活科の単元で,「情報を集めて整理することで，探求心をもって学ぶ児童の育成」をめざす実践が報告された。

まず，司書と協力した授業作りや選書コーナー作りをして，図書を使った調べ学習の環境を作った。学校司書による昔遊びをテーマとしたブックトークも行った。本の挿絵を用いて，昔の児童たちの生活を交えながらどんな遊びか話していただいたことで，児童たちは昔遊びの背景や昔遊び自体を知ることができた。ブックトークの後，実際に昔遊びの本を読む時間を設けたが，どの児童も興味をもって本を手に取って読んでいた。このことから，ブックトークは昔遊びへの関心や，遊びの本を読みたいという気持ちを高め，昔遊びを探求していく入り口や，図書を用いた調べ学習への入り口をして効果があったと考えられた。

また，遊びに対する思いを高めたり，遊び方を知ったりするために，図書を使った調べ学習を行った。この時にも，学校司書に選書や調べる際の支援を依頼した。1 年生でも読みやすい本を複数用意し，遊びの種類ごとに並べ，調べ学習の目的に合ったページには付箋を付けていただいた。そのため，児童たちは自分で本を選び，調べ始めることができた。その際には,「ペンタゴンチャート」を改良した「トライアングルチャート」という思考ツールを用い，遊び方や他は本を読んで気になったことや興味をもったこと，情報を整理しながら書くようにした。必要な情報を見付け出すことが難しい児童には，開いているページを一緒に声に出しながら読んで，必要な情報が書かれているのかを確認していった。

実践の中では，学習者用タブレットも活用していた。さまざまな情報源を用いることで，新しい気付きや課題を見つけることができ，探求的な学びのもととなった。図書資料では理

解できなかった部分を補うことができた。映像資料は，1 年生の児童にも有効であったが，より確かな情報を得るという意味でも，図書へ戻って調べる場を設け，図書資料のよさが再発見できる場を設定できるようにしていくことが大切であるということが分かった。本実践から，図書資料のよさを，改めて感じることができた。

（３） 学校司書や公共機関との連携

一宮からは，学級分館の増冊と貸出方法の工夫についての実践が報告された。学級分館用に，図書委員が委員会の時間に１０冊選書するが，内訳を９００番台の文学を５冊，それ以外から５冊として，普段は手に取って読まないであろう分類の本を選書した。図書委員の中には，学級の生徒からあらかじめ本のリクエストを受けて借りている姿もあった。さらに，学校図書館司書と連携し，授業内容や学校行事に関連する本を５冊選書して合計１５冊を各学級に配架した。委員会が毎月設定されているため，月に１度は学級分館の中身を入れ替えた。貸出方法の工夫として，学校ホームページを活用して，「オンライン検索＆貸出」を実施した。一宮市に導入されている学校図書館システム「探調 TOOLDX」のリスト出力機能を使い，図書館のすべての蔵書を「タイトル」「サブタイトル」「人名」「出版社」の見出しとフィルター機能をつけ検索できるように Excel で編集した。生徒は読みたい本が決定したら，貸出申し込み票を図書委員に渡し，図書委員が担当教師に手渡しをするか職員室内の指定の箱に入れた。用紙を受け取った教師が本を用意して担任から生徒に届くようにした。これまでのアナログな図書館利用とこれからの新しいデジタルな図書館利用を掛け合わせたことにより，主体的に図書館とかかわりをもつ契機となった。

稲沢からは，学級文庫の活用，図書館での本の紹介ポップや紹介カードの掲示，図書委員会による活動に関する実践が報告された。学級文庫には，授業に関連する本，学校図書館で興味をもったが借りるまでにはいかなかった本，児童が興味をもちそうな本を教師が選び学級文庫に置いた。また，その中の本を紹介したり読み聞かせを行ったりした。図書館や廊下には，児童や生徒がさまざまなジャンルの本を選ぶきっかけ作りや学習に関連した本を選べるように，教師がおすすめの本の紹介ポップ作りをして掲示を行った。小学校の委員会活動では，ブックビンゴを取り組んだり，大型絵本や紙芝居を使った読み聞かせをしたり，季節の本やシリーズ本などテーマを決めて紹介ポップや紹介カードを作り掲示したりした。中学校ではおすすめ本を模造紙にまとめ，来館した生徒が読みたいと思う本に学年カラーのシールを貼る活動を実施した。本を紹介することにより，普段は読まないジャンルの本に触れる機会になった。

豊橋からは，外国人生徒のニーズや日本語能力に合わせた図書館環境の整備についての実践が報告された。ポルトガル語や英語による案内表示，紹介ポップの作成と掲示，おすすめ本の紹介を行った。外国人生徒が本を手に取りやすくするために，外国語図書の配架場所を図書館と移動教室の際にも目にすることができる廊下に設けた。また，同じ場所に設置した図書コーナーには，絵本だけではなく，小学校低学年向けの読み物資料を配架するようにした。さらに国際教室にも，授業に応じたやさしい図書資料を国際担当教員と学校図書館司書で選び，面出しして配架した。図書委員会では，まず，縦割り学級対抗の BOOK コメントキャンペーンを実施した。借りた図書の感想や見どころをコメントカードに記入して図書館の壁面にクラスごとに掲示し，その数を競った。そして，「競う」ことから「発信」に方向を変えたコメントリレーキャンペーンへ発展させた。掲示の形も吹き出しの形とし，前のコメントをつなげて貼る方法をとった。「図書＝難しい」と考えていた外国人生徒の図書利用も増え，生徒たちが感想を共有できるようになったことで，新たな図書の魅力に気付き他者とかかわるものへと発展できた。

Ⅳ　情報交換・研究協議

○　教科等での図書館活用　学校図書館司書との連携　選書の工夫

児童・生徒が休み時間に図書館を利用する以外に，授業等ではどのような方法で図書館が利用されているかが話題となった。情報交換の中で，授業で利用する意図，利用したことによる効果や利用したことによる新しい発見などがあったと報告がなされた。

低学年の生活科，おもちゃ作りをする単元では，教科書で紹介されるおもちゃの他に図書館内にあるおもちゃ作りの図書を見て，「作りたい」という子が現れたと報告された。

また，高学年の社会科歴史の学習では，教科書で取り上げられている桶狭間という地名について詳しくなるために，図書館を利用したという報告もあった。いずれにおいても，教科書だけでは情報や例が足らず，より情報を得られるようにするために図書館を利用しているようであった。

このように国語科の授業に限らず，各教科の学習の補助や興味関心を高める上で，休み時間以外に図書館を活用する工夫はいくつもあり，図書利用をすることは，学習の補助教材として有用であることがわかった。

さらに，図書館司書との協力により，各教科のカリキュラムに応じて，一層図書の利用がなされるよう工夫している小学校もあった。学校全体でのとりくみとして，学年ごと，教科ごとに年間カリキュラムに合わせて，どのような図書資料が必要かを表にまとめており，図書館司書との打ち合わせのもと，授業前には各学級に対して必要な図書が準備された状況を作っているという。学級ごとにブックラックが準備されており，作成された表に応じて司書は必要な図書を準備し，ブックラックに入れて各教室の前に運ぶ，さらに詳しく調べたい場合は児童・生徒自ら図書館に足を運ぶというシステムとなっている。例えば，小学校５年生の工業について学習する単元では自動車関連，工業生産の図書資料を，理科では，物理，生物，化学，地学のそれぞれの学習に合わせて複数の図書が用意され，見識を深めることができるようになっている。また，「さらに図書館で調べたい」という気持ちにさせるために，雑誌『子どもの科学』などの児童・生徒が興味をもちそうな漫画や雑誌を図書館に複数取り揃えているという。

他にも，英語の授業の導入として興味をもってもらったり，外国人児童向けの図書を用意したりするという考えから，英語の絵本をたくさん入れている学校もあれば，部活動で練習方法を探ることができるように各部活動に関連した図書を用意している学校もあった。

○　ICT 教育との並行性

図書館や図書資料で得られる情報はインターネットでも得られるのではないかという問いが話題に挙がった。昨今，GIGA スクール構想の下，ICT 教育がすすめられ，どの学校でもタブレットやネット環境が整いつつある中，図書館の図書の有用性について話がなされた。

初めに話されたのは，図書自体にも情報価値があるという点である。小学校社会科の授業で近代史を学習する際，本の中にある時代を感じさせる文章や白黒写真はもちろんのこと，本自体の古めかしさが時間の経過と歴史を感じさせる。また，このような図書は昔から大切にされ引き継がれてきたという情報をも伝える。

また,インターネットの検索機能だけではたどり着けないような資料に出会うこともある。中学校の美術科では市の図書館から画集を借りてきて，生徒に見せたところ，紙の質感や絵の色合いが WEB 上で見るものに比べて，よりリアルだという意見が聞かれ好評であったという。これらの資料は団体貸出向けとなっており，準備や図書館利用の知識が要される。

しかしながら，ICT 機器にも利点があり，今後もそれぞれの利点をうまく併用し，子どもたちが主体的に学習活動できる手段を見つけていく必要があるだろう。

Ⅴ　助言から

○ コロナ禍におけるさまざまなとりくみや実践

昨年度，本年度ともに新型コロナウィルスの影響により実践が難しいことが懸念された。しかし，本年度の実践は，図書館を利用しづらい状況の中，コロナ禍にめげないタフな実践レポートが寄せられた。

２０２０年末に行われた学校図書館協議会の調査によれば，休業中に読書を課題とした小学校は５割強に上り，読書感想文や読書郵便が休業中の課題になっている学校もあった。また，お楽しみ袋の作成，リクエスト本の貸出，親子読み聞かせカードといった図書館発信で図書に親しみをもってもらえるようにするための工夫など，いずれにしてもコロナ禍の厳しい状況の中であっても学校図書館の機能を持続するような手だてがなされていると報告されている。

そのためか，休業中は貸出冊数が増えた，長編やシリーズものを読む子が増え，読書量が増えたなど，コロナ禍で家にいる時間が増えたことによって，よい方向へと影響している部分もある。学校図書館運営にかかわる私たちは，今回の経験を共有し合い，これを逆にチャンスとして捉え，必要な対策を行いながら新たな発想で図書館教育のよさを見つけていけるようにしていきたい。

本年度の実践では，ブックトークやおせっかい選書などの手だてが報告され，人とのつながりが薄れている児童生徒が図書の世界でさまざまな人と出会い，想いに触れることや，狭くなっていた視野を広げるといった点で意義深いものばかりであった。また，研究対象として情報活用の分野で実践数の少ない小学校低学年や,外国人児童に対しての実践があったが,どの学年，またどのような人でも利用がしやすい，誰のためにもなる図書館作りをめざしていくことが大切である。

○　中学校図書館の「情報センター」としての役割

第５次学校図書館政府計画によれば，図書に１１００億円，司書に１１００億円，新聞に１５０億円といったように莫大な資金が用意されている。

ある大学の学生に対してのアンケートでは，過去に図書館を利用していた割合は小学校８割，中学校２割，高等学校１割，大学６割となっている。なぜ，中学校や高等学校では図書館の利用率が低いのかを考えると，子どもにスマートフォンやタブレットが１人１台与えられている今，図書館に足を運ばなくても情報を得られるということや，読書好きな人，読書が趣味な人とそうでない人とでは,中学校の頃から分化されることが理由として推測される。そのため，教員や図書館司書がいかに図書館に向かわせようと努力しても，足を運ばない子どもは一定数いることが予想される。そこで見方を変えてみると，中学生の時期からはネット社会の中の不確かな情報に翻弄されないためにも，図書館は「学習センター」や「読書センター」としての役割を残しつつも,「情報センター」としての役割を強めていき，趣味としての文学を読む読書から，情報をとるための読書へのシフトしていく必要があると考えられる。

例えば，教科横断的な授業を行い，図書館で調べ学習をして発表するような年間計画を４月の段階で立て，図書館司書とコミットしながらすすめていくといった方法が考えられる。また，アメリカのスクールの一例では，学級ごとに日別でショートホームルームを図書館で行う日を決めており，自然と図書館という場所に馴染みをもたせるようになっている。このようにこれまでとは違いダイナミックな実践を考えていけるとよい。今回報告された実践では手だてが重層的に出されていており，今後の発展が期待される。

Ⅵ おわりに

本年度の県集会では，読書を通して，自己の考えを広げ，他者への理解を深めようとした実践が報告された。

目的に合った本を選書したり，主体的に情報収集を行い発信する活動を設定したりすることで，子どもが読書に対する価値を見出せる実践が報告された。

さまざまな事情をもつ子どもたちが主体的に図書館に関わりをもてるように，魅力ある図書館づくりを工夫した実践が報告された。

タブレット端末と本を併用し，子どもたちの主体的なとりくみを促す実践の報告も多くなされた。

情報交換では，教科等での図書館活用について，情報交換を行った。社会科や総合的な学習の時間に行う調べ学習での活用が目立った。その他にも，英語の授業への導入として，英語の絵本を紹介したり，美術の鑑賞の時間にさまざまな作家の画集を用いたりするなど，国語科以外での活用の例が意見として出された。

今後残された課題は，以下の三点である。

⑴　読書に親しむ活動や情報活用の授業を通して他者理解をすすめるとともに，地域や家庭と連携した図書館活動の計画

⑵　図書館運営の年間計画作成時に学校司書と連携をはかり，教科横断的な活動を学校全体で行っていくための工夫

⑶　発達段階や校種に適するように「読書センター」や「情報センター」としての学校図書館の機能を拡充させる工夫

学校の実情はさまざまであるが，これからも，子どもたちが読書を楽しみ，読書活動を通して，豊かな心を育んでいけるような支援をしていきたい。